

相模湾の魚類相—研究の現状と今後

瀬能 宏 (当館学芸員)

はじめに

相模湾にはどのくらいの種類の魚がいるのでしょうか。ある試算によれば、これまでに記録された魚類は1000種とも1300種とも言われていますが、正確な数を出すのはたいへん困難です。こんな基本的なこともわからないのかと驚かれる方もいるかも知れません。しかし、長期にわたる研究史の中に分散した記録を集大成するにはたいへんな労力が必要で、まだそのような仕事は誰も完成させていません。しかも、近年のスキューバダイビングの普及に伴い、これまで見逃していた場所から新しく発見される魚も跡を絶たず、未知の部分が想像以上に多いこともわかってきました。

ここでは相模湾にみられる魚類について、今後の研究の方向も含めて紹介します。

湾内で一生を過ごす沿岸魚

スズキやマダイ、ヒラメなど、お馴染みの魚たちの大部分がこのカテゴリーに入ると考えられます。相模湾の沿岸部の環境は、1) 伊豆半島の東岸に発達する出入りの少ない崖下にみられる岩礁とそこに隣接する砂底域、2) 小田原から鎌倉にかけての単調で広大な砂底域、3) 三浦半島沿岸の入り組んだ海岸とそこに発達する内湾的な入江に分けられます。

1) のエリアにはフサカサゴの仲間やイシダイ、アオブダイなど、岩礁域特有の魚たちが生息しています。ここは最も多くの魚種がみられる場所で、小型のハゼの仲間など、まだ十分に研究されていない魚もたくさんいます。岩礁に隣接する砂地には、キュウセンやヒメジ、ベラギンボなどが生息しています。また、「ごろた石」が積み重なった場所では、分類学的研究の遅れているミミズハゼの仲間が多数生息しており、特異な群集を形成しています。2) のエリアにはニベやシロギスなど、砂底域特有の魚が生息しており、相模川の河口付近など、陸水の影響を受ける所にはサッパやコノシロなどがみられます。3) のエリアには入江が発達し、その奥にはアマモ場がみられ、ヨウジウオやアミメハギ、ニクハゼなど、藻場を好む魚たちが生息しています。

湾を出入りする回遊魚

ブリやヒラマサ、マグロの仲間など、遊泳力の強い大形の回遊魚は、沿岸部や沖合いを移動しながら索餌や摂餌をします。種類数は多くありませんが、水産上重要な魚種が大部分を占めています。しかし、その割には博物館で保管されている資料が少ないのもこのグループの特徴です。カンパチとヒレナガカンパチなどは、専門家でも混同していることがあり、注意が必要です。

深海性の魚

相模湾の中央部には相模トラフと呼ばれる水深1300~1500mの平坦な海底の深海が広がっています。岸からほんのわずかの距離にこのような深海がある場所は、すぐお隣の駿河湾を除くと世界的にもそう例がありません。「生きている化石」として有名なラブカやミツクリザメなど、学術的に貴重な魚たちもこの住人です。中層で遊泳生活を送るハダカイワシ科やムネソコ科、海底付近で生活するソコダラ科、アシロ科、フサカサゴ科など、多くの種類が記録されています。

死滅回遊魚

毎年、夏から秋になると、ベラ科やチョウチョウウオ科、スズメダイ科など、サンゴ礁を代表する魚たちの幼魚が沿岸の岩礁域に多数現れます。これらのほとんどが成魚まで成長することなく、水温の低下する冬には姿を消してしまうことから、一般に死滅回遊魚と呼ばれています。これらの魚たちは、繁殖の行われるより南の海から、卵やふ化直後の浮遊生活を送る段階で黒潮によって運ばれ、相模湾にたどりつくかと推定されています。このような魚たちは、これまで魚類の研究が魚市場に水揚げされる魚を中心に行われてきたこともあって、調査の網の目から抜け落ちており、多数の種類が今後新しく記録されると予想されています。

固有の魚たち

海中は一般的に隔離が成立しにくいいため、局所的に分布する固有種はほとんど例がありません。ところが伊豆半島と伊豆大島の沿岸には、固有と思われる魚が3種類も知られています。ホ

タテエソ科のホタテエソ、ヨウジウオ科のダイダイヨウジ、ハタ科のシロオビハナダイがそうです。これらの魚たちが、いつ、どこに起源したのかは不明ですが、伊豆半島の本州への衝突など、大地の動きと何か関係があるのではないかと想像しています。

今後の取り組み

相模湾の魚類相の全貌を明らかにするためには、1) 過去の記録を漏れなく整理してデータベース化すること、2) 博物館などで未報告のままになっている資料を調査すること、3) 調査の網の目から漏れている魚を効率よくピックアップすることなどが重要です。3) については、スキューバダイビングによる採集調査と平行して、ダイバーが撮影した魚の水中写真をデータベース化することが最も有効な方法と考えています。もちろん、伊豆・小笠原諸島や南日本の黒潮沿岸域など、比較地域の魚類相の調査を同時に進めることも重要です。日本の動物学発祥の地として、長い研究の歴史を背負う相模湾ですが、魚類相については、まだまだ未知の部分が多いようです。



図1. 相模湾では珍しいシノノメサカタザメ (根府川産), 瀬能撮影.

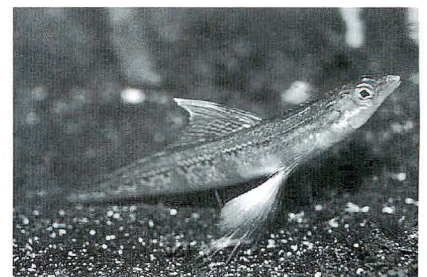


図2. 伊豆近海に固有と思われるホタテエソ (大瀬崎産), 反田撮影 (KPM-NR0001380).